

うず潮抄——フミ子の流浪記——

昭和三十九年十二月十五日 第一刷
昭和四十年一月五日 第三十刷

定価三三〇円

著者 田中澄江

東京都中野区野方町二ノ一六〇二

発行者 小沢和一

発行所 株式会社 青春出版社

東京都新宿区矢来町35番地

振替番号東京九八六〇二番

TEL (26) 〇四二七(26) 六七八〇

◇この本をお読みになったご意見ご感想を編集部までお寄せ頂ければ幸いです。



製本／石毛製本 印刷／弘済印刷 製版印刷

うす潮抄
フミ子の流浪記

田中澄江



フミ子は心のなかでつぶやいた。

「明日の自分がどうなっているかだれが知ろう」

海の上にはかもめであろうか、白く大きい鳥が鳴きながら幾つか空を横切って行くのが見える。フミ子は息深く深呼吸をして、このおだやかな空気全体を頭のひだの皮まで吸いこんでおきたいと思った。いま自分のひたっているさわやかなこの幸福が、明日はくだけ散るかも知れないのだと思ひながら……

うず潮の記

尾道へ行ったのは、今年の二月である。NHKの連続テレビ小説に、林芙美子の一代記を書くことをたのまれ、わたくしはしばらく考えてからひき受けた。

しばらくという時間の中で、わたくしがためらったのは一年間三百十回以上にも及ぶ長いものを書きつづけることができるかどうかという心配に加えて、その一代記を書くほどに、わたくしが、林芙美子というひとを知っていないことであつた。

生前には三十数年も昔、ある新聞社の文芸講演会で、詩の朗読をした、女流詩人、林芙美子というひとを、はるかに遠く眺めただけであつた。

わたくしは、長い袴をはいた学生で、林さんは桃割れか何かに結び、カフェーの女給をしていた頃ではなかったろうか、今、仕事場から駆けつけたところだと言ひ、男というものは、ひとの顔さえ見れば、ホテルに行こうなどと誘つて、はなはだ氣にいらぬというようなことを言ひ、その物言ひは、可成りたんか調で、やけっぱちですらあつた。聴衆は拍手したが、講演会という名の集まりとは肌合いのちがった、その八方破れ的な態度がおもしろかつたのであらうと思う。

それから二十年、林芙美子さんの名は、新聞雑誌の上にかがやいていたが、わたくしとの出会いは、彼女の死後である。

芝居を書くのを、自分の勉強としていたので、あまり小説などは読まないでいたのだが、昭和二十六年に、突然の死を迎えた林さんの絶筆「めし」を映画のために脚色させられることになった。つづいて「稲妻」「晚菊」「放浪記」など、テレビでも「下町」「女家族」「女の日記」「清貧の書」をやって、ゆくりなくも、林芙美子という一人の女の小説家の息づかいにふれることになった。

どういう生いたちを持ったか。どういう恋愛を重ねたか。どういうひとを夫にし、どういう人生観を抱いたか。愛について、思想について、神について、政治について、社会について、このひとはどういう態度でたちむかったのであろうか。

生前に親しく見ることも聞くこともなかったわたくしには、その遺された文字から辿る以外の鍵はないのだが、たまたま「一人の生涯」という、ある婦人雑誌に連載された自伝風の読みものを見出して、おもしろいことに気づいた。

これは昭和十五年に書かれ、林さん三十六歳の作品である。「放浪記」は昭和三年で二十四歳の時、林さんにとっては文字通り、旅をふるさとして育った少女時代のように、男から男へと放浪した青春の形見である。

「一人の生涯」は娘時代から、結婚後の外国旅行にもふれ、そこには新しい恋愛の匂いもかぎとられるのだが、おもしろいと思ったのは「放浪記」にあらわれたような、どこかニヒルな、自虐的な、暗鬱なかげがうすれて、同じように暗い人生を扱っても、その暗さの底に「放浪記」のような投げやりでないもの、暗さの底から這い上ろうとする微光のような意志や、「放浪記」のようにはしいままに溢れほうだいの放漫な感情をきびしく抑えようとする謙虚な心構えを見出したことであつた。

そこには十二年という歳月と、一応は満たされた作家的地位の確立ということもあるにちがいないが、何よりも、よりよい夫を得たという安心立命の場が、彼女にこのおちつきを与えたのだと思つた。

林芙美子というひとについて、あるひとが、こんなことを語っていた。

「もしも何人かの男たちから、手ひどい眼にあつていなければ、平凡でつましい奥さんになつていたかもしれない」

林さんは「平凡な女」という随筆のなかでこんなことを言っている。

「千人十色かもしれないが、わたくしは家族の御飯ごしらえもして、洗濯から掃除もたいて自分でやっている。（略）何も台所や洗濯を忘れることが女の榮譽とも思っていない」

そしていわゆる知識夫人とよばれるような人たちの中に、「美しさ優しさ」を軽蔑誤解して、口に猛々しいことを言うのがいいと言わんばかりのひとがあるのをわらっている。

林さんは実にたくさん的小説を書き、外国へも行き、戦地にも飛び、女としては異常なまでに精力的な生涯を持ったひとだけれど、その一面に平凡な主婦へのあこがれを胸に抱きつづけたひとでもあったのではないか。

そう思った時、わたくしは、NHKの仕事を引き受けることができた。

台所と書斎を、行ったり来たりするような女の物書きならば、多くの家庭の主婦にも、たのしんで見てもらうことができるであらう。

人間の値打ちを心の「美しさ優しさ」におくひとならば、大ぜいのひとたちの胸にも共通のひびきを起こすことができるであらう。

そして、わたくしはまた、生前の林さんをよく知っている板垣直子さんから、林さんは「放浪記」の中で、必らずしも事実を書いてはいないとうかがった。

やはり生前にお隣りの家だったこともあった壺井栄さんからも、林さんはよく泣いていたけれども、すぐあとでケロリとして歌を歌っていたともうかがった。

「一人の生涯」や、「文学的自叙伝」をはじめとする数々の随筆から、わたくしはわたくしなりの林美子像を書くことにきめ、尾道の女学校の旧友の木曾さんや、尾道時代の間借り暮らしの時、

隣りに住んでいた、うどんやの娘さんたちから、林さんのくせや好きだった歌なども聞いた。

題はN・H・Kが「うず潮」と名づけたが、これと同名の長い小説は、林さんの自伝とは関係がないので、ここからは何の話しもとりあげることにはなかった。「市立女学校」や「清貧の書」「放浪記」や「魚の序文」や「吹雪」や「放牧」「作家の手帳」「鶯」などという、小説の中のエピソードはその一部分を参考にしたが、ほとんどはわたくしなりの映像に合せてつくられた。

「放浪記」の中では、初恋に裏切られた林さんが、次々に男のひとにじめ抜かれることになっているが、男が裏切ったのではなく、自分から男をふり切った林さんにして見たらどんなものだろう。それも帝大というような学校歴でも最上で、家もゆたかで、姿形もよく、心もやさしく林さんを裏切らない、立派な青年を仮空人物としてつくりあげ、しかもこれを自分から思いきるような、男には溺れない林さんを描いてみたい。

そんな願いで始められたのが、NHKのテレビ小説の「うず潮」である。当然、林芙美子とはずい分ちがう人間になることを考えて、林フミ子とした。

目次

第一章	坂のある古い港町……………	11
第二章	遠い旅の空の思い出……………	72
第三章	愛のうず潮をさまよう……………	120
第四章	大杉光平というひと……………	185
第五章	涙に別れを告げる日……………	229

本文カット・辻和子

第一章

坂のある古い港町



1

尾道という町は、岡山と広島の間にある、古くからの港町である。

フミ子が、その丘の上にある県立女学校に入ったのは、大正七年。入学の時は、よい成績であったけれど、月謝もどこおり勝ちで、夜は帆布工場の女工をしたり、昼休みは子守りに出たり、などのことがあったせいか、卒業の頃は、英語や国語をのぞいては、かなり悪い成績になった。

よくうどん屋で御飯代りにうどんを食べ、ある時それが学校の先生に見つかって、大ぜいの前で注意されたこともあったという。

学校の図書室で、本が見えないと、林さんが持つて行ったのではないかとうわさされたりした。

学用品もろくろくそろわなかった。しかしずっと年下の男のひとを夫にした母が、いつもいつもきれいな丸まげに結び、おくれ毛一つ見せぬような、た

しなみを見せていたように、フミ子も、自分の弱味にしておたれるような娘ではなかった。

学校ではいつもおもしろいことを言つて、そのまわりに笑いの渦をまき起こし、卒業したら、上級学校へ進むのだと、国語の課外授業に加わったりしていた。

卒業を、あと二ヵ月たらずに控えたある日、理科の仁科先生は、黒板の文字を消し終ると、生徒のほうに向きをかえ、

「教科書を閉じなさい」とあらたまつた口調で言つた。

たちまち、教室内にざわめきが起こつた。生徒たちは、敏感に、ぬきうちの考査のあることを予感し、そのおどろきをつぶやかわしていた。

「しーっ、しずかに……」と級長の箱崎かつ子がいつもの生真面目な調子でみんなを制した。入学以来級長をつづける弁護士の娘である。

教室はもとのしずけさにかえり、黒板を走る仁科

先生の白墨だけが非情な音を立てていた。

一、葉の向日性について

二、葉の運動

三、切り花をながく保つに、水をふりかけ、暗きところ、箱、穴のなかななどにおくは、いかなる理由によるか

四、発散線とはなにか

先生は、かるく手をはたいて、チョッキのポケットから、大きな時計を出すど、

「では、少しばかり試験を試みよう。あと三十五分ある。やつてごらんなさい」と教卓の上から紙をとり上げ、前列の生徒にくばりはじめた。

ふたたび、生徒たちの間から、不平、不満の声が起こつた。

「三学期の成績にはいるんですか」

悲痛な声を上げる生徒もいた。

「まあ、そんなことは考えずに書きなさい……」
ともう五十近い先生は行いすましたようなおだや

かさで言った。

「先生ノ」こんどは箱崎かつ子が立ち上って、「葉の運動について呼吸や温度のことも書くんでしようか」

すると、また、急にささやきが高まり、「ご秀才はちがうわ」などという声が聞こえた。

「そう、呼吸や温度についても書いたほうがいいでしょうねえ」

箱崎かつ子は、満足そうに大きくうなづいて、席につき、生徒たちの間から、哀れっぽい吐息がもれたが、肩をまるめて、問題を解いていく箱崎かつ子のたくましい後姿にそそられたようにいつか、教室はえんびつの音だけになった。

汽笛の音が聞こえ、窓の下を上りの汽車が行く。

フミ子は黒板の文字を見ながら、『葉っぱは、葉っぱ、自分の呼吸は、自分の呼吸……』などと心のなかでつぶやいていた。何かそんなことを書いてもつまらない気持だった。

窓の向うに青々と海が見える。汽車の音が遠ざかって行く。あの列車のなかには、今日もまた旅行くひとたちがあふれているのだろうか。

フミ子は、下関に生まれたが、そのふるさととはと聞かれたら、旅であつた、と答えるであろう。八才の時から、母と養父につれられて、北九州一円の町々を、行商してまわり、海をわたって、中国地方へはいり、ある日、ふと汽車の窓から、賑かそうなのを見て、この尾道という海岸町に降りたつたのは、彼女が十二の春であつた。ほんの腰かけのつもりであつたのに、彼女はここで小学校を終え、つづいて當時は市立だった女学校に入つて四年近い歳月をすごしたのだった。卒業のあかつきは、できれば東京へ行きたい、上の学校へも行きたいが、目前に迫つた修学旅行の費用もおぼつかない身では先づゆめものがたりにちがいない。そのはかなさを思えば、むきになつて答案などを書く気にもなれなかつた。フミ子は隣席の小畑きみ子に答案用紙をそつとわたし

た。

「早春に咲く花の名は何々ぞ」と書いてあった。背が小さいので、いつも並んで仲よしの小畑は、くすんと笑いかけて返事を書きはじめた。仁科先生が、スルスルと近づいて、「ちよつと見せてごらん」小畑の手から紙片をとり上げた。

「カンニングではありません」とフミ子は反射的に答えて、「早春に咲く花の名は……」、紙片の文字を見ながら、「寒ぼけ、梅、アネモネ、……」と先生が読み出すと、

「福寿草、金せんか……」と小畑が言った。つづいてフミ子が「水仙や、菜の花もあります」笑い声がどよめいた。先生も笑いながら、紙片をフミ子に返し、「まじめに書かないものは、卒業できないかもしれないよ」と言った。いっそう大きな笑いが、教室にひろがり、間もなく、終刻を知らせる鐘の音が、ひびいてきた。

仁科先生が、集めた答案用紙をかかえて、廊下へ

出ると、箱崎かつ子は、先生の忘れていった出席簿を持って、そのあとを追った。

教室には、解放のさわめきが高まり、その声々を背にうけて、林フミ子は、黒板の文字を、ひとつひとつ消していきながら、別な文字を、書いていった。

『一ツ、修学旅行』

「ああ、あ、またゾロゾロとならんで歩かせられる」と料亭の娘の大山のぶえが叫んだ。『二ツ、運動会』とフミ子は書いた。

「うちは運動会がいちばんきらい、いつもビリッロだもの……」と小畑きみ子が胸を抱いて身をくねらせる。

『三ツ、謝恩会』とフミ子が書くとき、

「そうねえ、早く謝恩会の余興の出しものをきめなくちや。文芸部員、失格だわ」と音楽学校志望の松本千代子がまじめな口調で言った。

「大山さんがちよつと踊ればいいのよ」金貸しの娘

の都井芳江に肩をつつかれて大山のぶえが「ひやーッ」と大げさな悲鳴を上げた。

「四ツ、卒業式」とフミ子は書いた。

だれともなく「仰げば尊し」のハミングが起こり合唱になった。

「五ツ、社会」とフミ子は書いた。

「六ツは、何にしよう……」反射的に、大山のぶえが叫び声を上げて、「結婚」、みんながけたたましく奇声を上げると、もどって来た箱崎かつ子が、

「ちよっと、教室に残っていると叱られるわよ。こんどの卒業生は、一番だらしなかつたって言われないうちにしましうよ」

一瞬、フミ子は教壇をとり降りると、おどけた顔つきになった。

「御心配なく、叱られ役は、わたしがひき受けるから」

箱崎かつ子は、そんな彼女の胸をえぐるように「……それから、上の学校の願書を出すひとは、今

週中にまとめて下さいって、先生が……林さんほどこ？」と鋭い一べつを投げた。

「さあ、どこにしようか、目下、思案中」とさりげなく首をかしげたフミ子が、

「箱崎さんは東京？ それとも大阪か、京都？……」と問い返すと、

「うちは、日本の学校へは行かない」と箱崎は壮重な顔つきで、一瞬息をのんだ。まわりを見まわしながら「アメリカ」と言った。

2

海沿いの道に面した雑貨屋の二階が、フミ子とその両親の住まいであった。大杉質店の質流れ品を背負って売り歩いている母は、大い留守のことが多く、今日も帰って電灯のスイッチを入れると、四畳半と三畳がつづいて、道具らしい道具もないわびしい部屋が浮び上った。

火を起こし、お湯をわかし、とにかく晩飯の支度